

昭和女大家政 村井不ニ子 後藤好子

昭和女短大 ○安蔵裕子

目的 本報は、明治期における洋装導入の背景と、その特質について研究をすすめるため、基礎的データの収集としての実態調査から、第九報に引きつづいて、滋賀県愛知郡小林家所蔵の洋装資料について、その一部を報告するものである。

方法 第九報にひきつづき、本報においては、カウンス、立衿シャツと股引の組み合わせ、白麻地ジャケットについてとりあげ、同様に形態、素材、各部計測による構成パターンの検討、縫製技法、付属品等の特質について報告する。

結果 カウンは、絹の表地(こげ茶色)と裏地(ぼたん色)の配色があざやかで、木綿わたを全体に張り、手縫いのステッチでとじられた、いわゆるキルティング仕立てである。主にナイト、カウンスとして着用されたものと思われるが、袖の切り替え、紐によるボタンかけに特色がみられ、機能性と同時に、手の込んだ縫製、デザイン的配慮からは、一種のおしゃれ着としての要素が濃い。立衿シャツと股引の揃いは縞柄のフランネル地で、下着と考えられ、衿のボタンは、カラーの着脱のためとおもわれる。この資料は、ワイシャツ、カラー、カフスといった一連の着装方法にかかわる点でも興味深い。ジャケットは、単仕立てであり、直線的な形態は簡素ではあるが、背広型とは異なったデザイン感覚は今も新鮮である。本資料からは、洋装史上主流をなす伝統的な基本型からの応用、展開、創意工夫などの特色がうかがわれる。